唐招提寺蔵『孔雀経音義』の反切について

佐々木　勇

一、唐招提寺蔵『孔雀経音義』の概要と本稿の目的

1．本音義の概要

本稿で取り上げる唐招提寺蔵『孔雀経音義』は、森本孝順蒐集本として『唐招提寺古写経選』（一九七五年、中央公論美術出版）に解題とともに部分写真が公開され、『北大国語学講座二十周年記念　論輯　辞書・音義』（一九八八年、汲古書院）において、石塚晴通によって、論文・漢字索引とともに全巻写真が公刊されたものである。

以下、先行研究を参照しつつ、本音義の概要を述べる。

本音義は、不空訳『佛母大孔雀明王経』三巻の漢字を出現順に抄出し、それに音注を加えた巻音義である（孔雀経の他の漢訳本『孔雀王呪経』（二巻本・一巻本）『仏説大孔雀王呪経』『仏説大金色孔雀王呪経』『大金色孔雀王呪経』とは、本文が一致しない）。

本音義の本文は、漢字に反切を注した前半（一オ～一八ウ）と、『佛母大孔雀明王経』中の陀羅尼を集めた後半（二〇オ～三〇ウ）とで成る。前半の注文は、一四オ「遭」に「真言中漢語」とある以外は、反切のみである。掲出字と反切とに、朱声点が加点され、朱仮名音注が数例存する。また、後半は陀羅尼字に声点・仮名を加点するばかりで、注文は無い。

本音義外題の「孔雀経音義」は後世の記入であり、「孔雀経音」と呼ぶのが内容にふさわしいことが言われている。[1]

次に、孔雀経本文とともに、本音義前半と後半の冒頭を掲げる。

『佛母大孔雀明王経』本文（国会図書館蔵貞応三年版本による）

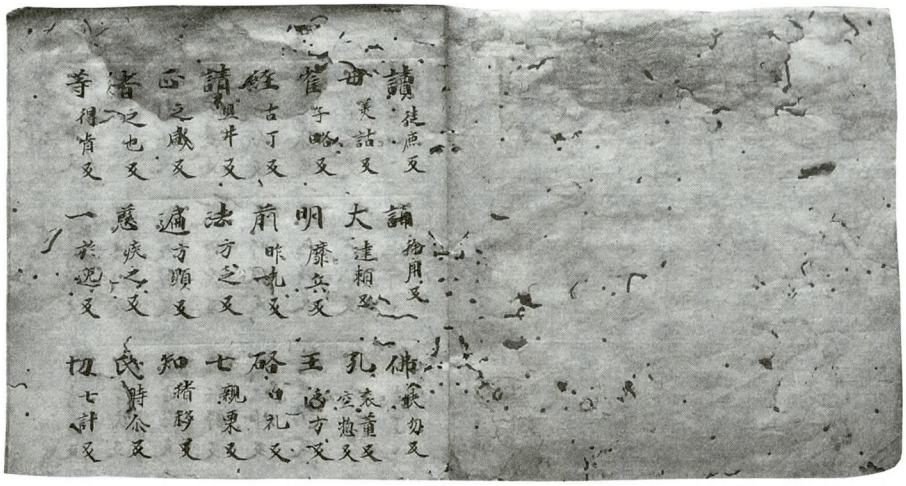
読誦佛母大孔雀明王経前啓請法

特進試鴻臚卿大興善寺三蔵沙門大　廣智不空奉　詔譯

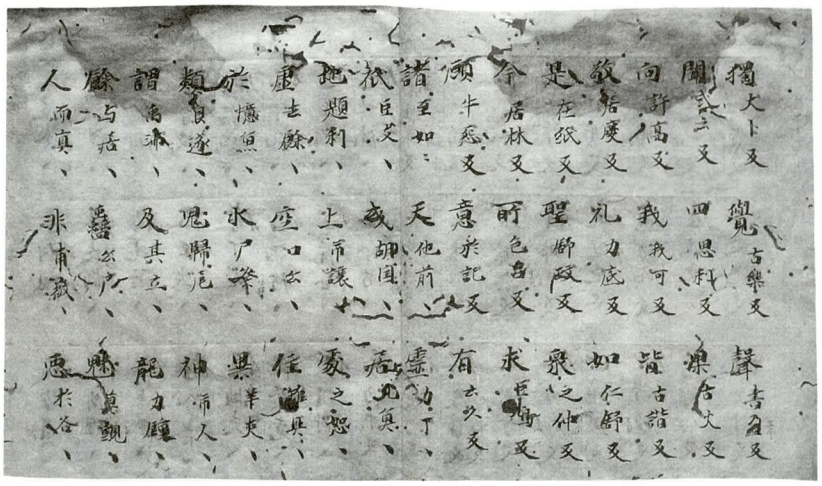
南謨母駄野　南謨達磨野　南謨僧伽野

南謨七佛正遍知者　南謨慈氏菩薩等　一切菩薩摩訶薩　南謨獨覚声聞四果四向　我皆敬礼　如是等聖衆　我今読誦　摩訶摩瑜利　佛母明王経　我所求請願皆如意　所有一切諸天霊祇　或居地上　或処虚空　或住於水　異類鬼神　所謂諸天　及龍　阿蘇羅　摩睹多　薬叉　彦達縛　緊那羅　摩護羅伽　薬叉羅刹娑　畢舎多　比舎遮　部多　矩畔拏　布単那　羯吒布単那　塞建那　嗢麼那　車耶　阿鉢娑麼羅　塢娑怛羅迦　及餘所有一切鬼神及諸蠱魅人非人等諸悪毒害

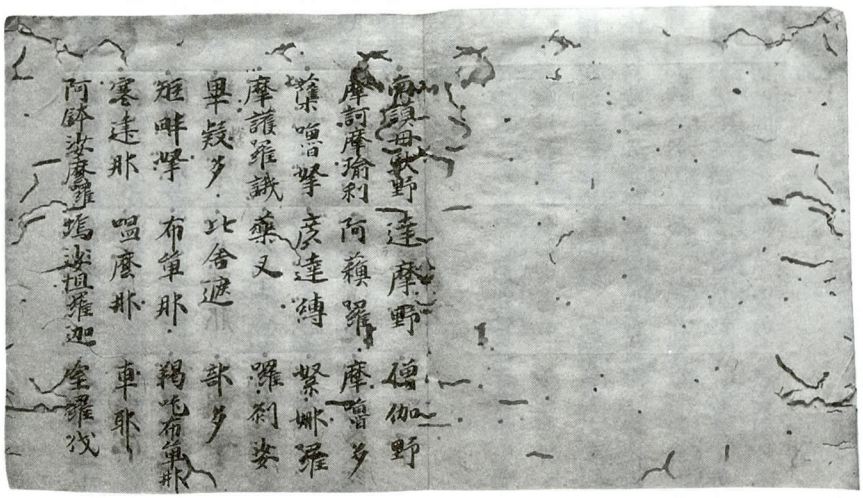
（1オ）



（1ウ）



（2オ）



（20オ）

（花野憲道氏より借用した写真による）

これは、先行する孔雀経音義とは異なる形式である。陀羅尼部分を一括して後半に掲載している点は、他の孔雀経音義よりも整えられたものと見ることができる。[2]

ただし、本音義も、他の孔雀経音義と同様、日本で撰述されたものと考えられている。[3]

本音義の書写・加点は、本文・仮名の字体から、院政期と推定されている。[4]

前半の意訳字掲出字には濁声点が存せず、後半の陀羅尼掲出字には濁声点が見られる状態も、孔雀経字音点における十世紀末から院政期間の状態と一致する。[5]

本音義の成立時期については、不明である。しかし、声点が、院政期以前の実態を反映した加点であるならば、本音義の成立も院政期以前となり、それよりも古く平安時代であった可能性も生じる。[6]

2．従来の研究

本資料については、前半の反切と声点とに関する研究がなされている。次に、本稿にかかわる反切の研究について、まとめる。

沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）二一八・二一九頁では、本音義に『妙法蓮華経釈文』が引用する「麻杲切韻」と一致する反切が存し、日本漢音と一致する新系反切が一部採用されることから、「秦音を反映した新しい韻書から採用された可能性」を指摘し、同『日本漢字音の歴史的研究』（一九九七年、汲古書院）八〇頁では、「麻杲切韻は秦音を反映する部分の有った韻書と考えられ、本書全体がその麻杲切韻を積極的に利用した結果であった可能性も有る」とされている。

また、前記石塚論文では、本資料の第二四四字までの反切を『廣韻』と比較し、それをもとに次のように考察している（具体的な作業としては、廣韻反切を全面的に引用する高山寺本『孔雀経単字』と比較されている）。

全體として切韻・廣韻系の發音を示しながらも、反切用字が廣韻と一致するものは三～四割であり、秦音系の特徴をも有してゐるので、読誦音をも考慮して秦音系の反切を然るべき韻書より取り込んでゐることが注目される。[7]

秦音を反映する反切が存することが、ともに指摘されている。

ただし、秦音系韻書と切韻系韻書の反切とは重なる部分があるため、本書の反切が全面的に秦音系韻書に依ったものか部分的に取り込んだものかの判断は困難である。

3．本稿の目的

本資料反切の特徴は、右でつきている。他の孔雀経音義が中国中古音の反切を付す中で、本音義は特異なものである。義注が無く、反切のみであるから、編者が必要を認めたのは、反切音である。

現在の課題として、本資料反切の全体に亘る先行文献との比較と、反切が示す音体系の整理とが残されている。この作業は、今後、本音義の声点を日本漢字音資料として活用するためにも、必要である。

そこで、本音義前半の反切に問題をしぼり、次の二点を明らかにすることを本稿の目的とする。

A．本音義の反切は、先行文献の反切とどの程度一致するのか。

B．本音義の反切は、全体としてどのような音を示すのか。

二、本資料反切の概要

1．反切を有する掲出字数

本資料は、他の孔雀経音義と比べて、反切を有する漢字数が多い。注2築島論文で第一類本とされる高山寺本で音注を有する字は全五一三字、第二類本の醍醐寺蔵平安中期写本では三九四字であり、本音義の八四二字に遙かにおよばない。[8]

また、本音義で反切注を有する掲出字八四二字のうち、第一類本の醍醐寺観静本でも反切が存する漢字は三三一字、同じく第二類本の醍醐寺平安中期写本に反切が存する漢字は三〇二字でしかない。しかも、先行する二本は、意訳字と陀羅尼字とを分けず、陀羅尼字にも反切を付しての数である。[9]

2．反切の種類と反切数

本資料の反切には、墨筆のものと朱筆のものとがある。

墨筆の反切は、掲出字の右下に掲出字より小さな字で書かれるもの(これを第一反切と呼ぶ)と、その左に第一反切に並べて書かれるものとがある(一オ二行目「孔」左の反切の如きもの。これを第二反切とする)。第二反切は、掲出字の下に第一反切と均等に並べられる。字の大きさも、反切が一つだけの場合よりはやや小さい。よって、書写時に第一反切と同時に書かれたものと思われる。

朱筆の反切は、墨筆第二反切の位置に書かれることが主であるが、その余地が無い場合は、他の位置に記される。希に、第一反切の上字または下字のみに対してその傍らに記す場合もある。また、一八ウに掲出字「飾」が朱で補入されている。第一反切が朱で記されるのは、この場合のみである。

本資料の各掲出字には、最多で四つの反切が加えられている。その反切数は、次の通りである。(以下、反切を「(掲出字)／(反切上字)(反切下字)」とし、所在は『北大国語学講座二十周年記念　論輯　辞書・音義』の頁数と行数で示す。)

第一反切：墨―八四一例、朱―　一例

第二反切：墨―　三九例、朱―三九例、墨補筆―一例

(不／方負450.1の上字に「久」の補筆)

第三反切：墨―(なし)、朱―　九例、墨補筆―一例

(瘦／所祐反475.4に「蘇后反」の補筆)

第四反切：墨―(なし)、朱―　一例

総計　九三二例。(内、虫損のため、四例不可読。)

三、先行文献の反切との比較

1．本音義内の出典記述

本資料の反切で、出典を明示しているのは、次の一例のみである。

饒／於焼　「而昭反」(左)　「切云―如招反」(上欄)450.8

(「　」内は、朱筆。以下同。)

この「切云」の反切「如招反」は、「切三」「王三」「広韻」の反切に一致する(略称は、上田正『切韻諸本反切総覧』に依る。以下同)。ただし、この反切は、上欄に書き込まれたものであり、第一・第二反切の「於焼」「而昭」は、現存切韻諸本の反切には一致しない。

2．先行文献の反切との一致数

引用が明らかな『切韻』および同一反切が指摘されている『妙法

蓮華経釈文』に若干の現存資料を加えて、本資料の全反切と比較してみる。

比較の対象とする資料とテキストは、次の通りである。

（資料名下の〈　〉内は、本稿における略称）

①妙法蓮華経釈文〈釈文〉―古辞書音義集成所収本に依る。

②廣韻―周祖謨『廣韻校本附校勘記』（一九六〇年、中華書局）に依る。

③完本王韻〈王三〉―『唐写本王仁昫刊謬補缺切韻』（一九六四年、広文書局）に依り、龍宇純『唐写全本王仁昫刊謬補缺切韻校箋』（一九六八年、香港中文大学）を参照した。

④大廣益會玉篇〈益玉〉―書陵部蔵宋版（615・106）を小学彙函本（一九八二年、台湾中華書局）によって校訂したものに依る。

⑤天治本新撰字鏡〈字鏡〉―西東書房複製本（一九三三年）に依る。

⑥篆隷万象名義〈万象〉―高山寺資料叢書所収本に依る。原本系玉篇の代用とする。

⑦天永本孔雀経音義〈天孔〉―古辞書音義集成所収本に依る。

⑧平安中期写本孔雀経音義〈平孔〉―古辞書音義集成所収本に依る。

⑨玄応一切経音義〈玄応〉―古辞書音義集成所収諸本に依る。

⑩慧苑音義〈慧苑〉―大日本校訂大蔵経音義部為十に依る。

右十資料の反切と本資料反切との比較作業の一部を表1に示す（掲出字の出現順）。

表1

連番	該字	反	切	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
1	誦	徒	鹿				1		1			／	／
2	誦	徐	用				1		1			／	／
3	佛	扶	勿					1				／	／
4	母	美	詁	1								／	／
5	大	達	賴				1	1	1	1		／	／
6	孔	袞	董									／	／
		空	惣							2	2		
7	雀	子	略	／			1					／	／
8	明	靡	兵				1					／	／
9	王	禹	方				1		1			／	
10	経	古	丁				1					／	／
11	前	昨	先	1	1	1				1	1	／	／
12	啓	口	礼				1		1				／
13	請	且	井				1						／
14	法	方	乏	1	1	1		1		1	1	／	／
15	七	親	栗								／	／	／
16	正	之	盛	1	1	1	1		1		／	／	／
17	邇	方	顯				／	1	／		／	／	／
18	知	猪	移				1	1	1	1	／	／	／
19	者	之	也				1				／		／
20	慈	疾	之		1	1	1	1		1	／	／	／
21	氏	時	爾						1		／		／
22	等	得	肯	1						／	／	／	／
23	一	於	逸			1	1	1	1	／	／	／	／
24	切	七	計	1	1	1	1			／	／		／
25	獨	大	卜				1			／	／	／	／
26	覚	古	楽				1		1	／	／		
27	聲	書	盈		1	1	1			／	／	／	／
28	聞	武	云				1			／	／		
29	四	思	利				1		1	／	／	／	／
30	果	古	火	1	1	1				1	／		／
31	向	許	亮	1	1	1	1	1	1	／	／	1	／
32	我	我	可							／	／	／	／
33	皆	古	諧	1	1	1	／			／	／	／	／
34	敬	居	慶	1	1		1			／	／	／	／
35	礼	力	底				1		1	／	／	／	／
36	如	仁	舒				1			／	／	／	／
37	是	在	紙							／	／	／	／
38	聖	舒	政				1	1	1	／		／	／
39	衆	之	仲	1	1	1	1		1		1	／	／
40	今	居	林				1		1	／	／	／	／
41	所	色	呂	1						／	／		／
42	求	巨	鳩	1	1	1				／	／	／	／
43	願	牛	怨					1	1	／	／	／	／
44	意	於	記	1	1	1	1	1	1	／	／	／	／
45	有	云	久	1	1	1				／	／	／	／
46	諸	至	如				1			／	／	／	／
47	天	他	前	1	1	1	1	1		／	／	／	／
48	靈	力	丁				1	1	1	／	／	／	／
49	祇	巨	支	1	1	1	1	1		／	1		／
50	或	胡	國	1	1	1	1	1	1	／	／	／	／
51	居	九	魚	1	1					／	／	／	／
52	地	題	利				1	1	1	1	／	／	／
53	上	市	讓				1				／	／	／
54	處	之	恕	1							／		／
55	虚	去	餘					1		／	／	／	／

（①～⑩―文献番号、1―第一反切と一致、2―第二反切と一致、／―反切なし、空欄―反切は存するものの不一致）

表1のようにして、全反切について作業を行なった。その結果、何例の反切が一致したかをまとめたものが、次の表2である。

〈表2〉諸資料における本資料反切との一致数

	①釈文	②廣韻	③王三	④益玉	⑤字鏡	⑥万象	⑦天孔	⑧平孔	⑨玄応	⑩慧苑	計
第一反切 墨筆	450	399	321	273	210	196	92	77	47	8	
第二反切 墨筆	11	18	14	8	4	3	7	8	1	—	
第二反切 朱筆	7	6	10	5	5	2	12	9	1	—	469
第三反切 朱筆	1	2	2	1	2	1	3	—	—	—	425
第四反切 朱筆	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	347

（比較対象資料は、本資料第一反切と一致する数が多い順に並べた。—は、例が無いことを示す。また、明らかな誤写例は、訂正の上、算入している。墨筆補筆の二例は、墨筆に加えている。）

次に、右十資料の反切で、本音義反切を何例覆うことができるかを数える。

第一反切墨筆では、八四〇例（虫損の一例を除いた数）の内、約九〇％にあたる七五五反切が表2の十資料のいずれかの反切と一致する。第二反切墨筆三九例では、十資料と二八例が一致し、第二反切朱筆三九例は二三例が一致する。第三反切八例中では、四例が一致し、唯一の第四反切は⑦孔雀経音義と一致する。

また、右十資料とは、一致しない反切の内にも、他資料の反切と一致するものを指摘できる（慧琳音義—五例、廣韻・王三以外の切韻残巻—二例、図書寮本『類聚名義抄』—二例）。

以上、比較したわずかの現存資料によっても、相当数の同一反切を指摘できる。なお残る不一致例には、類似の漢字の音を引いているもの、韻書に記載されない音が存したかと疑われるもの、誤写の可能性が考えられるものなどが含まれる。

よって、本資料の反切は、編者が考案したものではなく、何らかの典拠から引用したものと考えられる。

3．本音義反切の主要出典

本音義の注文は、原則として反切のみであり、その出典を限定することは、きわめて困難である。それは、表1からも明らかなように、右の十資料には、それぞれ同一の反切が存するからである。

ただし、主要出典の範囲を絞ることは、ある程度可能であろう。そこで、以下、それを試みる。

本音義反切との一致数が少ない文献のうち、⑩慧苑と一致する八例の反切は、①～④までの諸資料反切に含まれる。また、⑨玄応も、他資料と一致しない反切は二例に過ぎない。よって、これらは、本音義反切の直接の出典とは考えられない。

一方、⑦⑧孔雀経音義は、一致例が少なく主要出典とは言えないものの、⑦⑧と本資料反切一致例のうち、掲出字「鸚・鵡・禍・蠓・癮」は、他の八資料には反切そのものが無い。「鸚鵡」は、孔雀経中に出る語で、⑦⑧音義・本音義とも、二字を連続して掲出字としている。よって、直接引用の可能性が高い。本音義の編者は、主要出典に得られない反切を先行する孔雀経音義から補ったものと考えられる。先に、本音義の掲出字を他の孔雀経音義と比較し、本音義掲出字が他の孔雀経音義の二・五倍以上であることを見た。おそらく、他の孔雀経音義を主要典拠とすることは、当初から考えられていなかったのであろう。

つぎに、⑤新撰字鏡をとりあげる。

本音義反切と一致する二二一反切中、他九文献に見られず新撰字鏡のみに存する反切は、三二例である。

ところで、新撰字鏡は、玉篇・切韻・玄応一切経音義を引用することが明らかにされている。[10]

そこで、単独で一致する三二例が、新撰字鏡におけるどの部分に位置するかを調査した。

a切韻引用部分	六例
b玉篇かと疑われる部分	一例
c玄応音義を含む部分	一三例
d出典不明部分	一二例

aの六例中、現存切韻残巻に当該反切が見出せるものは無い。しかし、「鏡／居命」(447.5)は、和名類聚抄が引く「孫　切韻」と一致する。

bの一例「虚／去餘」(449.3)は、現存玉篇・同逸文に見出せない。だが、『篆隷万象名義』に、同音の「虚・墟」に「去餘反」が記されている。

cの一三例は、古辞書音義集成所収『玄応一切経音義』反切とは、すべて一致しない。

dは、不明とせざるをえない。

以上、不明の部分が多いが、本音義反切との一致数も考えると、新撰字鏡から直接引用されたのではないといえよう。

ここで、①②③④⑥の諸資料、すなわち法華経釈文・切韻・玉篇が残った。

この中で、法華経単独の音義であり、掲出字数が切韻・玉篇に比してはるかに少ない法華経釈文との一致数がもっとも多いことに注目される（表2参照）。

しかし、法華経釈文に反切が存しながら、それと本音義反切とが不一致のものが二二八を数える（第一反切の場合）。切韻・玉篇では、不一致例はさらに多い。このことから、これらの諸資料をそれぞれ引いたのではなく、妙法蓮華経釈文・切韻・玉篇の性格を合わせ持つような書があり、それからまとめて引用したという可能性も否定できない。

次に、切韻系韻書では、廣韻と王三とのどちらに近いかを調べてみる。

②廣韻・③王三と本書の反切一致例のうち、②と③とで重なるも

のは、二七七例である。また、②廣韻とのみ一致する例は一二二例、③王三とのみ一致するのは四五例である。よって、本音義は、②廣韻により近い。[11]

同様に、④大廣益會玉篇と⑥篆隷万象名義との反切一致例のうち、両者重なるものは、一四八例である。④大廣益會玉篇とのみ一致する例は一二五例、⑥篆隷万象名義とのみ一致する例は四八例である。したがって、本音義は、④大廣益會玉篇により近い。[12]

よって、本音義の反切は、比較的新しい②廣韻・④大廣益會玉篇により近いといえる。

以上の検討によって、本音義の主要出典は、法華経釈文・廣韻に近い切韻系韻書と改編本系玉篇とであったか、または、それらの反切を合わせ持ったような書であったと考えられる。

このうち、法華経釈文・改編本系玉篇とは、いずれも、中国唐代北方音(秦音)の特徴と一致する反切を含むことが指摘されているものである。[13]

四、本音義反切の分析

1．従来の指摘

本資料反切について、具体的に、秦音の特徴を示す反切の存在がいわれていた(前引沼本・石塚論文)。ここで具体例を挙げれば、次の諸反切である(　)内の説明は、私にまとめたもの)。

母／美詁　拇／莫苦　(侯韻明母の模韻化を反映する。)

風／甫豊　不／方負　(「豊」「負」は、軽唇音化により直音化した掲出字の音を示す。)

目／亡卜　毒／徒木　(「目」「毒」が直音化したため、直音「卜」「木」で注する。)

指／之紙　飢／几治　威／於危　(止摂諸韻の合流を反映する)

教／居幸　(唐代のng韻尾の弱化による。)

前節の検討から、本音義には、秦音の特徴と一致する反切がさらに存することが予想される。よって、以下、本音義反切の全体について、検討を加える。

2．本資料反切と中国中古音の体系とのずれ

本資料は、系連法により体系を帰納する反切数を有しない。よって、先行研究にならい、『切韻』の体系(『廣韻』に依る)と比較し、そのずれを見る方法を採る。

A．声母

掲出字と反切上字声母を、『廣韻』に依って対比させた。その結果、『廣韻』の体系からはずれる例を左に記す(誤写の可能性が存する例は、ここには掲げない)。具体例の下に(　)に入れて、反切が一致した比較対象文献を番号で記す。ただし、⑤新撰字鏡と単独で一致する場合は、その出典をも記し、新撰字鏡での出典不明の場合は、「⑤不明」とする。

【第一反切】

〈唇音〉軽重を区別した。

掲出字声母—反切上字声母

1．幇(全清)—非(全清):兵／甫明474.6(この反切は、①②と一致)

遍／方顯447.6　(⑤不明)

表／方少480.7(⑤不明)

2．並(全濁)—奉(全濁):復／扶富458.1(①②③⑤)

皮//符羈471.6(②③⑤)

3．明(次濁)—微(次濁):名//武兵453.5(不一致。反切上字は、①②③と一致)

苗//武儘474.3(①②③)

美//無鄙461.7(①②③)

沬//亡活455.1(④)　冒//亡到457.7(④)

面//亡戰461.2(⑥)　猫//亡交476.4(①)

免//亡辨477.8(①②⑧)

4．滂(次清)—非(全清):偏//方延458.6(⑤不明)

5．並(全濁)—微(次濁):便//文銭464.2(⑤⑦)

6．敷(次清)—幇(全清):忿//布粉476.5(⑤不明)

以上である。1．2．3．は、軽重を区別したために相通例となったもので、切韻系韻書にも例が存する。

大島正二『唐代字音の研究』(一九八一年、汲古書院)の分析にならい、廣韻に合う例を含め、声母の軽重別対応関係を表にまとめる。

表3

反切上字 / 掲出字			
軽唇音	重唇音		重唇音
1	20	幇	
—	4	滂	
—	12	並	
—	28	明	
1	65	計	
12	4	非	軽唇音
6	—	敷	
10	2	奉	
28	6	計	
9	9	微	軽唇音

右のように、軽唇音字に重唇音字を注した例は一例(⑤新撰字鏡の反切と一致)のみである。これは、『切韻』とは異なり『唐代字音の研究』に掲げられた唐代諸音義の傾向に一致する。

〈舌音〉

1．泥(次濁)—娘(次濁):念//女店460.2(①)

2．知(全清)—端(全清):謫//帝各479.2(⑤不明)

3．澄(全濁)—定(全濁):宅//徒泊475.6(①)

持//大狸456.6(不一致)

4．定(全濁)—澄(全濁):第//持計479.8(①)

5．知(全清)—徹(次清):張//勅良480.1(不一致)

以上である。掲出字と反切上字の声母清濁が異なるのは、5のみである。ただし、上に掲げたとおり、舌頭音と舌上音との混同例が見られる。これらは、『唐代字音の研究』の諸資料にも存し、「六朝時代の反切用字法を襲用したことに因る」と推測されている。

〈歯音〉

1．照(全清)—禪(全濁):征//尚楊471.2(⑤不明)

朱//上兪481.6(不一致)

2．照(全清)—邪(全濁):掌//緒両472.1(不一致)

3．従(全濁)—邪(全濁):自//辞二464.3(①)

浄//似正451.3(⑤不明)

晴//徐盈482.4(⑤⑥⑧)

絶//似悦454.7(⑤⑥)

4．神(全濁)—禪(全濁):食//是力451.6(④⑤⑥)

脣//視均459.2(⑥)　神//市人449.5(④)

舌//時列459.3(④)

5．禪(全濁)—従(全濁):是//在紙448.5(不一致)

6．精(全清)—照(全清):井//之郢479.8(不一致)

7．精（全清）―清（次清）：讃／千乱481.2（不一致）
8．心（全清）―照（全清）：須／止由458.4（不一致）
9．心（全清）―清（次清）：悚／聰紅465.4（不一致）
斯／雌氏467.4（不一致）
10．心（全清）―審（全清）：傷／書良473.4（⑤不明）
11．初（次清）―精（全清）：参／子金479.7（不一致）
12．山（全清）―心（全清）：縉／蘇堯466.5（不一致）
13．穿（次清）―照（全清）：處／之恕449.2（①）
14．審（全清）―荘（全清）：焼／爪照478.6（不一致）

これらも、『唐代字音の研究』諸資料に見られるところである。1・2は、全濁音の無声化を反映した例であろう。3・4・5も、両者の無声化を前提としていると考えられる。

〈牙音〉

1．見（全清）―群（全濁）：撃／渠悪476.2（不一致）
2．見（全清）―溪（次清）：劫／去結464.7（不一致）
3．溪（次清）―見（全清）：慶／吉敬477.3（不一致）
孔／袞董447.2（不一致）
4．溪（次清）―匣（全濁）：亢／下唐480.2（⑥）

1は、『唐代字音の研究』諸資料にも見られ、全濁音の無声化を反映している。4は、喉音との混同例となるが、⑥万象名義に同反切が存する。

匣母と于母とは混じていない。

〈喉音〉

1．暁（全清）―見（全清）：虫／肝鬼476.8（④⑥⑦）
2．匣（全濁）―見（全清）：獲／居縛456.4（⑤不明）
3．于（次濁）―見（全清）：胃／居謂480.5（⑦）

いずれも、喉音と牙音との混同例である。しかし、それぞれ同一の反切を先行文献に指摘できる。廣韻記載音以外の音が存したものであろう。

【第二反切】

1．明―微：猫／武儉476.4（②③）
2．心―清：線／千爾481.8（⑤不明）
3．溪―見：奎／古携480.5（不一致）

これらは、いずれも第一反切にも見られた相通である。

4．精―影：背／委瑩479.4（不一致）

これは、別音として存したものか。不明である。

【第三反切】

第三反切は、全九例である。しかし、その中に、次のような掲出字・反切上字声母不一致例が存する。

1．山―心：痩／蘇后（補筆）475.3（不一致）
2．心―邪：線／「似□」481.8（不明。ただし、⑦は「似箭」）
3．邪―照：涎／「之延」474.5（不一致）

【第四反切】（全体で一例のみ）

1．見―于：誑／居況　九況　「九妄　于放」475.8（⑦）

資料⑦は「九妄」とともに「于放」を挙げている。

以上、個別の音の問題と思われるもの、不明のものを含む。しかし、唐代になって分かれた軽唇音と重唇音とが区別されていると見られ

る。また、全濁声母の無声化を反映していると考えられるのも、唐代資料に共通する特徴である。

B．韻母

韻母では、切韻の体系からはずれるものを、秦音の特徴として認められているものごとにまとめて挙げる。[14]

【第一反切】（上・去・入声韻目は、平声韻目で代表させる。）

1．一等重韻の合流（第二反切以下もともに記す）

a冬—東直：膿//乃公474.4(①④⑥)　毒//徒木450.1(④)

統//他孔473.6(図書寮本類聚名義抄と一致)

冬韻掲出字は、右以外では「疼//徒冬459.8」が存するのみである。すなわち、全四例のうち三例は、東韻反切下字である。

2．二等重韻の合流

a刪—山：斑//補間470.5(④)

3．三等専属韻と三等乙類韻の合流

a元—仙乙：言//魚乾451.7(不一致)

b塩乙—厳：倹//渠儼480.7(④⑤)

c祭乙—廃：衛//韋穢462.6(④)

4．梗摂諸韻の合流

a清開—青開：磧//且歴「清昔」472.6(⑤⑥。第二反切は不一致)

役//惟壁457.4(⑤切韻)

b清開—庚拗開乙：名//武兵453.5(不一致)

領//離景473.7(⑤⑥)

c青開—庚拗開乙：瓶//皮兵471.6(不一致)

5．止摂諸韻(支・脂・之・微韻)の合流

a支開乙—脂開乙：奇//伎耆477.2(不一致)

b脂開甲—支開甲：指//之氏454.6(不一致)

c脂合甲—支合甲：雖//死随466.2(不一致)

d脂開乙—之乙：師//所緇466.7(①)　視//時止457.6(④)

洟//餘之474.5(⑤⑥)　屍//式之467.8(①②)

e微合乙—支合乙：威//於危456.1(不一致)

6．侯韻明母—模韻：母//美詁447.2(①)

拇//莫苦454.6(不一致)

本資料掲出字の侯韻明母字は、右二例と「某//莫厚「謨部」452.1」とで、全例である。「某」の第一反切は、①②③と一致し、反切下字は侯韻である。ただし、第二反切下字「部」は、侯韻の外に模韻の音をも持つ。ここでは、第一反切と異なる音を示したと考えれば、この第二反切も右二例に加えられることとなる。第二反切は、天永本孔雀経音義と一致する。

7．軽唇音化による拗介音の脱落

a耕合—陽開乙：獲//居縛456.4(⑤不明)

8．右以外で、唐代資料に類例が見られる通用

（［　］内に、『唐代字音の研究』に類例を記す頁数を示す。）

a灰—㊀：毎//莫改463.1(①⑨)　［一五六頁］

//七宰463.4(④)

b豪—肴：報//肴〔布〕教482.2(不一致)　［一六一頁］

c鍾甲—東直：悚//聰紅465.4(不一致)　［一六四頁］

d虞甲—尤甲：須//止由458.4(不一致)　［二一五頁］

9．右以外で先行資料の反切と一致する通用

a東直—江：僉//烏江　烏貢473.1(⑤不明、第二反切②)

b 魂 —文 :没//莫勿481.3(⑤不明)

c 元開—寒 :蠍//呼遏 許謁465.1(①⑥、第二反切③④⑦⑧)

d 元合—魂 :翻//孚奔455.2(⑤不明)

e 寒—仙開甲:残//才鮮 昨安474.5(⑤不明、第二反切④)

f 刪開—先開:顔//牛年 五姦479.3(⑤不明、第二反切①②③④)

g 耕開—唐開:謫//帝各 竹厄479.2(⑤不明、第二反切不一致)

h 清開—陽開甲:征//尚楊 諸盈471.2(⑤不明、第二反切②③⑧)

10. 上記以外で、切韻の体系からずれる例

a 青開—唐開:擊//渠惡 古歴476.2(不一致、第二反切①②③⑨)

b 清開—肴 :瘳//於昴 「緲郢」458.6(不一致、第二反切⑦⑧)

c 肴 —蕭 :禚//蘇堯 「所交」466.5(不一致、第二反切③⑧)

d 斉開—皆開:髀//必介459.6(不一致)

e 寒 —桓 :讚//千乱 子旦481.2

(不一致〈開合の乱れ〉。第二反切①④⑥)

f 侯—鍾甲:喉//胡鋒 「鍭」(下字のみ)459.4

(第一・第二反切とも不一致。ただし、第二反切は侯韻。)

g 侵乙—覃:歛//呼弔 許及475.7(不一致。第二反切②③⑦)

h 別字の音を注した例:杖//徒計 直両460.4(不一致)

「杖」の反切としては、第二反切がふさわしく、①②③⑤⑥⑦⑧は、「直両反」である。「徒計反」は、「杖」の反切である(④に一致)。孔雀経本文では、「杖足龍王」にあたり、掲出字は正しい。

【第二反切】

第二反切は、上掲例から知られる通り、第一反切と別音を示している。『廣韻』において複数音ある場合の一方を示す、あるいは、第一反切が『廣韻』音に合わない場合に『廣韻』音を示す場合が多い。したがって、中古音の体系に原則として一致する。一致しないのは、次の例のみである。

仙開甲—支開甲:線//弭旃 千爾 「似□」481.8

この反切は、⑤新撰字鏡と一致する(新撰字鏡における出典不明)。別音として存したものであろう。

【第三反切】

中古音とずれを見せるのは、補筆による次例のみである。

尤乙—侯:瘦//所祐 「又」(下字のみ) 蘇后(補筆)475.3

(不一致。第一反切①②、第二反切④⑤⑥)

【第四反切】(中古音とのずれ無し)

以上、韻においても、秦音に一致するものを加えることができた。

C. 声調

本音義掲出字と反切下字の声調を廣韻によって、整理するとつぎの表4のごとくになる。

表4 (空欄は、例が無いことを示す。)

反切下字 ＼ 掲出字		平	上	去
全清	平	128		
次清	平	33		
全濁	平	80		
次濁	平	77		
全清	上		2	
次清	上		2	
全濁	上		1	
次濁	上			
全清	去			3
次清	去			2
全濁	去			1
次濁	去			
平		71	2	77
上		24	2	14
去		31	1	51
		43		41
平				3
上				2

右表のとおり、掲出字と反切下字との声調は、大部分一致する。唐代に入って指摘されている全濁上声の去声化は、可能性があるものの二例にすぎない。ただし、『唐代字音の研究』諸資料でも、この例は少数しか指摘できず、まったく見られない資料も存する。よって、本音義反切が唐代の書に依拠していると考えても矛盾は無い。

五、孔雀経字音点との比較

前節では、本音義中に、秦音を反映する反切が、これまで指摘されていたもの以上に存することを記した。

一方、孔雀経字音点も、秦音の体系に一致することが明らかである。[15]

ここで、本音義の反切音と古訓点資料に記された孔雀経読誦音とを比較してみる。

比較の対象とした孔雀経古訓点資料は、次の五本である。

ア．東寺蔵院政期点（第十四函一号）

イ．仁和寺蔵建久八年（一一九七）頃点

ウ．東京大学蔵鎌倉中期点

エ．龍門文庫蔵延慶二年（一三〇九）点

オ．国会図書館蔵元応二年（一三二一）点

（ア・イは、沼本克明先生からお借りした写真・移点本に依る）

1．声母

本音義反切の分析において指摘した「軽唇音の独立」「全濁音の無声化」が、孔雀経読誦音に反映していることは、公表されている分韻表によって、明らかである。他の諸本も基本的な相違は無い。

2．韻母

ここでは、前節分類の8以下に掲げた諸字中、掲出字の音と反切音との相違が仮名書き例に表れる可能性のあるものについて、孔雀経古訓点資料と比較してみる。

問題の例を再掲し、それに一致する仮名書き例に傍線を引いた。（　）内が訓点資料の仮名書き例。複数の形が存する場合は、それぞれの例数を記入した。）

a．反切と一致する例を見出せないもの

瓮／烏江　烏貢473.1（ヲウ5・タウ1）（ママ）

顔／牛年　五姦479.3（カン）

征／尚楊　諸盈471.2（セイ）

悚／聰紅465.4（ンヨウ）

須／止由458.4（ンユ）

没／莫勿481.3（ホツ）

撃／渠悪　古歴476.2（ケキ）

瘻／於鼎　「纓郢」458.6（エイ19・エウ1・エ1）

髀／必介459.6（ヘイ）

線／弭旃　千爾　「似□」481.8（セン。濁声点無し。）

歙／呼弔　許及475.7（キフ3・キウ2）

b．反切と一致する例を見出せたもの

残／才鮮　昨安474.5（サン12・サム1・セン2）

謫／帝各　竹厄479.2（テキ5・タク1）

蠍／呼遏　許謁465.1（ケチ3・ケツ2・カツ1）

稍／蘇堯　「所交」466.5（サウ8・セウ3）

瘦／所祐　「又」（下字のみ）　蘇后（補筆）475.3（シウ13・シユ2・ソウ2・セウ1）

翻／孚奔455.2（ハン5・ホン1）

以上のとおりであり、実際の読誦音に見出せない例が多い。また、読誦音に一致する場合も、その漢字の中心的な読みとは言えない。

よって、先の分析で、中古音にも秦音にも一致しない音は、孔雀経読誦音においても、一般的とはいえない。本音義は、そのような反切をも掲載しているのである。しかし、当該字の主な読誦音と一致する反切を、併せて注す場合が多いことも指摘できる。

3．声調

孔雀経古訓点資料は、全濁上声の去声化例が比較的少ないことが、大東急記念文庫蔵寛治五年（一〇九一）点および資料ウによって言われている。[16] この二資料については、筆者の調査でも同様であり、資料エも去声化例が少ない。

しかし、孔雀経字音点でも、すべての加点資料で全濁上声の去声化例が少ないわけではない。本音義掲出字と一致する漢字について調査すると、資料ア・イ・オでは、全濁上声字に対する上声点・去声点加点例数は、ほぼ等しい。

従来知られていた、全濁上声の去声化例の少ない資料は、中古音の規範に則った加点であったのではなかろうか。[17]

すなわち、中古音声調とほぼ等しい資料と全濁上声の去声化を反映した資料とが存し、本音義反切は中古音声調と大きく変わらない読誦音に一致するということになる。

六、むすび

以上、唐招提寺蔵孔雀経音義の反切について、次の二点に問題をしぼり、検討してきた。問題と検討結果を記し、むすびとする。

A．本音義の反切は、先行文献の反切とどの程度一致するのか。

本音義の反切は、九割までは、現存文献反切と一致するものであった。その主要な部分は、妙法蓮華経釈文・改編本玉篇・廣韻に近い切韻と考えられた。

B．本音義の反切は、全体としてどのような音を示すのか。

本音義の反切には、すでに指摘されているもの以外にも、秦音の特徴を示すものを見出せた。

右に、本音義の主要出典を妙法蓮華経釈文・改編本玉篇・廣韻に近い切韻と考えたのであったが、それらの反切の拠り所となった祖本から直接引いたと考えることも可能である。[18]

孔雀経読誦音に合うか否かの検討では、読誦音に合わない反切も存した。ただし、その反切を記すにとどめず、読誦音に合う反切を補った例も指摘できたことから、孔雀経読誦音を示す意図が存したものと考えられる。

本音義は、反切音注のみであることと反切の示す音とから、孔雀経読誦音を考慮しているのであろうことが指摘されていた。[19] 編者が、意訳字と陀羅尼字とを分けたのは、意訳字と陀羅尼字との読誦音が異なるためであろう。また、意訳字の掲出字数が他の孔雀経音義に比して多いのも、義注は必要なくとも音を示すべき字が存したためと考えられる。その反切は、孔雀経読誦音に近い典拠から引用したものであることが、本稿の検討によってより一層明らかになった。

以上、本稿は、本音義を日本漢字音資料として位置づける基礎作業を行なったものである。

注

(1) 石塚晴通「孔雀経単字　解題」（『古辞書音義集成　17』（一九八三年、汲古書院））。

(2) 築島裕「醍醐寺蔵孔雀経音義　二種　解題」（『古辞書音義集成11　孔雀経音義(下)』所収）では、『佛母大孔雀明王経』の音義を第一類から第三類までに分けている。本資料は、そのいずれにも属さない。

(3) 沼本克明『日本漢字音の歴史』（一九八六年、東京堂出版）二一九頁、石塚晴通「唐招提寺蔵孔雀経音義」（『北大国語学講座二十周年記念　論輯　辞書・音義』（一九八八年、汲古書院）所収）参照。

(4) 前注、石塚論文。

(5) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（一九八二年、武蔵野書院）付論第一章、参照。

(6) 平安時代成立の音義に単字掲出のものは一般的ではないが、醍醐寺蔵平安中期写本孔雀経音義は単字掲出の形式であるので、本音義も平安時代成立と見て支障はない。

(7) 以下、佐々木注。「然るべき韻書」が何であるのかは、不明である。石塚は、「慧琳音義は使用してゐないものと察せられる」としている。

(8) 沖森卓也「孔雀経音義について」（高山寺資料叢書別巻『高山寺典籍文書の研究』一九八〇年、東京大学出版会）、参照。

(9) 陀羅尼字に中古音の反切を付しても孔雀経読誦においては実用的でない。後半の陀羅尼字に反切が無いことからも、本資料が実際の読誦音を反映していることが予想される。

(10) 貞苅伊徳「新撰字鏡の解剖〔要旨〕」「（同）付表」（「訓点語と訓点資料」第一二・一四・一五輯、一九五八・六〇・六一年。後、『新撰字鏡の研究』（一九九八年、汲古書院）所収。）

(11) その他の切韻系韻書との対照も、『十韻彙編』（一九六三年、台湾学生書局）および上田正『切韻諸本反切総覧』（一九七五年、均社単刊第一）によって行なったが、残存部分の反切が本音義と全同であるものは無い。「恠／古懐462.7」は、他の切韻系韻書では、「古壊反」とされるものであり、管見の範囲では『新撰字鏡』のみ「古懐」に作っている。そして、新撰字鏡所引の切韻は、長孫訥言系であることが判明している（上田正「新撰字鏡の切韻部分について」（「国語学」一二七集、一九八一年一二月））。

(12) 本音義反切には、新撰字鏡の玉篇引用部分に一致すると思われる反切が存した。新撰字鏡所引玉篇は、増加玉篇（孫強撰）の系統かといわれている（西端幸雄「新撰字鏡と玉篇（発表要旨）」（「国語学」一一五集、一九七八年一二月））。

(13) 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』第一部第三章、三章。

(14) 黄淬伯『慧琳一切経音義反切攷』（一九三一年、中央研究院歴史語言研究所）、河野六郎「朝鮮漢字音の研究」、平山久雄「中古漢語の音韻」、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』など参照。

(15) 原裕「東京大学国語研究室蔵『佛母大孔雀明王経』字音点分韻表」（「訓点語と訓点資料」第一〇一輯、一九九八年九月）・李京

哲「東京大学国語研究室所蔵『佛母大孔雀明王経』の分韻表」（「鎌倉時代語研究」第二十二輯、一九九九年五月）、参照。

(16) 沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第二部第五章、参照。

(17) 李京哲「日本漢音に於ける梗・曽摂の字音形を巡って ―『佛母大孔雀明王経』諸本を中心に―」（「訓点語と訓点資料」第一〇五輯、二〇〇〇年九月）注22でも、このような解釈がなされている。

(18) 一般に、反切は保守的なものである。秦音をよく反映する『慧琳音義』といえども、その反切のすべてが切韻の体系と異なるわけではない（上田正『慧琳音義反切総覧』、同『切韻逸文の研究』等、参照）。

(19) 本稿「一、2．従来の研究」に引用した諸論。

〈付記〉本稿は、第八十三回訓点語学会研究発表会（二〇〇〇年十月二七日、於安田女子大学）における研究発表をもとにしている。席上、池田証寿・沼本克明両先生よりご質問・ご意見を頂戴し、調査・考察を加えることができた。また、鈴木恵・原卓志・青木毅の各氏からもお教えを頂いた。さらに、査読委員の先生方から、有益なご助言を賜った。

なお、本音義写真の掲載には、唐招提寺並びに花野憲道氏のご許可を賜った。ここに、記してお礼申し上げる。

〔ささき　いさむ、広島大学助教授〕

（平成十二年十二月七日受理）